善隣

No.534 通巻801

2023年（令和５年）４月１日発行（毎月１日発行）

2023 4

一般社団法人 国際善隣協会

表彰状

小笠原　孝　様

あなたは防火管理の重要性を深く
認識し防火管理者として積極的に
業務の推進に努め災害の発生
防止に寄与されたその功労誠に
顕著であります
よって開庁七十五周年にあたりこれを
表彰します

令和五年三月七日

東京消防庁
消防総監　清水洋文

芝消防署の児玉予防課長（消防指令長）から防火管理者に対し表彰与された
（2023年３月16日）

善隣　目　次　2023年４月号

公開講演会記録

貴州に魅せられて……李　海　2

台湾海峡危機を煽るＮＨＫ
—政権の意向に従う公共放送と世論誘導……長井　暁　11

反中・嫌中への分水嶺を作った一冊の本
—名存実亡の田中角栄・周恩来共同声明……矢吹　晋　20

会員彼是

元中国語奨学生として……宮　秀夫　28

陶々俳壇……馬場由紀子　29

中国ウォッチング……編・訳　上松玲子　30

協会通信・同好会だより……　32

2023年４月の行事予定……　33

みんなの写真館……　32
（姜晋如、塚原美津子）

善　隣　第534号　通巻801号
2023（令和５）年４月１日発行
発行所　〒105-0004　東京都港区新橋1-5-5
一般社団法人　国際善隣協会
TEL　03（3573）3051
FAX　03（3573）1783
発行人　矢野一彌
編　集　原田克子
編集協力　朝　浩之、山谷悦子
印刷所　㈲ゆにおんプレス
TEL　048-834-1201
定価　一部400円　年額4,800円
振替　00120-0-145956
国際標準逐次刊行物　ISSN 0386-0345
ⓒ禁無断転載

当協会は、中国ならびに近隣諸国との相互理解を深め、友好親善・交流を推進しています。
一般社団法人　国際善隣協会

公開講演会記録

貴州に魅せられて

貴州民族大学外国語学院 準教授　李　海

●貴州とは

貴州といっても、日本ではあまり知られていない。それも仕方のないことで、そもそも中国でさえあまり注目されていない地域なのである。まして、海を隔てた日本ではなおさらそうであろう。例えば、四川料理の店は今や日本の随所で見受けられるようになったが、辛くて酸っぱい料理で知られる貴州料理の店は数年前、ようやく1店舗ができたにすぎない。

中国史においても貴州の存在感は薄い。貴州に関係のある四字熟語と言えば、「夜郎自大」、「黔驢技窮」（なけなしの技）の2つがあるが、いずれも肯定的な意味の語ではない。貴州については、「天に三日の晴れの日なし、地に三里の平地なし、民に三分の銀もなし」とよく言われるが、まさに言い得て妙であると思う。なお、日本にも多大な影響を与えた王陽明は、この貴州の省都である貴陽市の修文県に流され、そこで心学を打ち出した。だが、時代の流れは貴州に変化をもたらした。長らく貴州が発展から取り残されてきたことには、それなりの理由がある。「豊かになりたければ、まず道を作れ」この中国の諺が、貴州の課題である。この発展の足かせが取り除かれたならば、発展の進捗は当然早まるであろう。

貴州の発展を阻害してきた要因としては、このように交通事情が挙げられる。中国では唯一平野がない省であり、山地が多いため交通は不便であった。政府も、交通事情の改善を最優先の取り組み課題とし、大量の資金を投入してきた。

貴州の空の玄関口である龍洞堡空港は、30以上の山を切り崩す大工事の末に完成した。今やこの空港は中国有数の大規模空港として、年間約２１００万人が利用している。日本の関西国際空港との間に直行便があるが、現在はコロナで運休している。省都の貴陽市も中国西南部における交通の要となった。

とはいえ、貴州人の性質はあまり変わっていない。交通の便の悪さという歴史的要因が、そこに住む人々の生活や気質にも影響を与えたのである。山地が多ければ大量生産は難しい。自給

自足の農業経済が成立したが、人々は狭い地域での、細々とした生活に満足してしまった。結果として沿海部の広東省や福建省の人々よりも、開拓精神に欠けるといわれるようになった。

●最先端を走る―気候をいかしたビッグデータ産業

近年ビッグデータ産業が貴州経済を牽引していることも注目に値する。ビッグデータ産業がなぜこの僻地に合うのかと疑問に思われるだろうが、実は冷涼な気候が同産業の発展に適していたのである。

そもそも工業蓄積が少ない貴州で、発展を重要課題とするならば、いかなる産業を選ぶべきか。製造業や重化学工業を選んだところで、それらに関する蓄積が進んでいる他地域に追い付くのは困難である。それならば、ということで、蓄積が少なくて済み、現地の気候にも適した情報通信産業、中でもビッグデータ産業に貴州の指導層は白羽の矢を立てたのである。

気候との相性の良さを具体的に述べるならば、ビッグデータ産業は大量のサーバーを必要とするが、それらは一定の温度下で管理される必要がある。だとするならば、冷涼な環境での運営が適しているのである。

中国の国土の大半は、夏になると酷暑に悩まされる。一方、貴州、中でも省都の貴陽周辺は夏でも涼しく、平均20度ほどである。30度を超える日は稀であるため、避暑地としても好まれている。

大量のサーバーは放熱が必要だが、山の多い貴州では、それらを山中に設置している。山を掘削し、設備を置けば、冷涼な環境下で安定管理が見込める。電気代の節約は中国の著名大企業ファーウェイだけで年間数百億円にも上るといわれているが、貴州のビッグデータ産業も費用があまりかからない。

データセンターの温度を適切に管理できるため、ＩＴ設備のハードウェアの耐用年数が長くなり、サーバー事故も少ない。結果として、データセンターの運営費用を削減できるのである。

貴州は工業蓄積が少ないことはすでに述べたが、それゆえに自然環境は破壊されなかった。このような背景もあり、貴州は工業発展と環境保護の両立を掲げている。山の多い貴州では森林被覆率も高く、２０２２年度のそれは62・12％である。この数値は日本全体の森林被覆率68・４％と比べても大差はない。加えて、貴州は空気も良く、ＰＭ２・５の数値も全国では低い方である。

２０２１年、貴州のビッグデータ産業は同省経済のうち34％を占めた。増加率は６年連続で中国の省・自治区域のうち首位を走っている。特に、２０２１年度におけるソフトウェアと情報サービス産業の営業収入は59・３％増加したが、全国平均の増加幅41・６％を大きく上回っている。

２０１５年４月のビッグデータ取引所の設立も中国国内初のことであった。

２０２２年に貴陽で設立された同取引所には３９０社が集まり、関連製品は４９５個に上る。取引成立回数は１０８回、そして売上金額は１億６３９８万元（約32億円）であった（『貴陽日報』２０２２年11月９日）。

今後、２０２５年度には貴州省のビッ

グデータ産業の規模は3千億元（約5兆9142億円）に達する見込みである。世界トップ500社に含まれるアップルやIBMをはじめ、アリババ、テンセント、ファーウェイ、京東など中国国内の著名企業も貴州に拠点を構えている。なお、貴州のビッグデータ産業関連企業の半数は貴陽に集まっており、5千を超える。これらの中には上記国内外の大企業傘下の中小企業も含まれる。また、貴陽で新たに設立された国家級開発区である貴安新区は、世界で最もビッグデータ産業が集積されている地域の1つなのである（『瀟湘晨報』2022年2月24日および『貴州日報』2022年4月22日より）。

●伝統も守る―民族文化のモザイク

一方で、農村振興は中央政府が注力している分野である。貴州の農村振興には民族文化ならびに田園など景観の保護という2つの特徴がある。貴州には17の民族が代々居住しており、多様かつ豊かな文化が存在する。

貴州は、国内でミャオ族、トン族、水族が最も多く住む地域でもある。例えば、バサ・ミャオ族の部落は中国で最も原始的な民族部落である。狩猟を生業とするため中国では唯一猟銃の所持が許されている地域でもあり、その物珍しさからか、国内外の観光客を惹きつけている。世界的に知られた旅行ガイドブック『ロンリープラネット』が発表した「Best in Travel 2020」によれば、2020年の訪問すべき世界十大観光名所のうち、中国では唯一貴州が第6位に入っている。

貴州料理は四川料理、広東料理のように知名度が高くはないが、酒と民族舞踊と合わせて楽しめるという特徴がある。酒では、白酒の中でも名高い茅台酒だけでなく、その他のブランド酒も枚挙に暇がない。茅台酒の産地では街中に居酒屋が軒を連ねており、お酒の香りが漂ってくると言っても過言ではない。

色鮮やかな民族衣装をまとう少数民族の少女たちが、アルコール度数50度を超える蒸留酒を注いでくれる。アシ製の管楽器である蘆笙などの民族楽器が悠揚たる調べを奏でる中、勧められるとついつい杯を重ねてしまう。このような少数民族の文化も貴州の経済・社会における重要な要素の1つである。

現代文明が発達するならば、その一方で失われたものへの懐古の情も募ってくるものである。貴州には豊かな少数民族の文化だけでなく、「老漢族」と呼ばれる漢族の居住地がある。貴陽に近く、かつアジア最大級の瀑布である黄果樹が位置する安順市の「天龍屯堡」がそれである。

1368年に朱元璋が明朝を樹立したが、前政権元朝の残余勢力が梁王を主として帰順を拒んでいた。1381年、朱元璋は梁王征討のため約30万の軍を送った。数か月にわたる激戦の後、梁王は自決し、残余勢力は鎮圧された。だが、元朝の遺臣と現地の支配者である「土司」が手を結び再度反乱を起こすおそれがあったため、朱元璋は「屯堡」と呼ばれる屯田兵を大規模に駐屯させたのである。

屯田兵たちは江蘇省、浙江省といった長江下流地域の出身者であり、貴州定住後600年の間、明朝の文化・伝

統を守り続けてきた。屯堡人の言葉は数百年の歳月を経ても、周囲の言葉と同化しておらず、古代中国語の音声研究にはうってつけの「生きた化石」とまでいわれている。服装に関しても、屯堡の女性は伝統を受け継いでいる。青色の裾の長い服、精緻な緑の飾りからは、長江下流地域の刺繍の真髄が見て取れるだろう。先端が尖った婦人靴にも刺繍が施されており、屯堡女性の優雅な暮らしぶりが垣間見える。屯堡女性服も、これまた明朝期の漢族伝統衣装を研究するための「生きた化石」なのである。これらの他、屯堡の食料品、建築物、戯曲も歴史研究の対象となっている。

このように少数民族や漢族の過去の原風景が多く残されている貴州の大地は、中国有数の観光地になりつつある。

●格差是正に向けての取り組み

貴州の発展においては、格差是正策も特筆される。中国では発展の均衡が取れておらず、沿海部と中西部には経済格差がある。この格差を解消するため、中国政府は是正策を実施している。

この是正策の中身は、中央政府からの指示に基づく、主として西部の人々に恩恵を与えるプロジェクトである。これは日本の雁行型経済発展論の援用とも解釈できる。つまり、日本の経済発展に伴い、アジアＮＩＥＳも発展し、その流れに中国も続いた。そして、中国国内では沿海部から始まり、その発展の波が内陸部や西部に及ぶというものである。そして中西部出身者は労働力として大いに期待されている。

数年前、北京の空港で日本の元政治家に再会したことがある。その人は、当時労働組合の理事長を務めており、中国から日本への研修生招致のため訪中したとのことであった。話によれば、近年では中国の沿海部と日本との経済格差は縮小しており、同地域出身の研修生受け入れは難しくなっているそうである。そこで、その人は代わりに内陸の甘粛省での研修生募集を推進していたのである。

そういえば、中国の駐日大使館が、日本の労働組合と協議のうえ、甘粛省出身者に職業訓練を施し、日本へ研修生として派遣したというニュースも最近耳にした。このような中央政府主導の下での、内陸部・中西部から海外への出稼ぎ促進も、有益な選択肢といえよう。

中央政府だけでなく、発展している東部の省や市が、劣後している中西部の省を支援している。支援の中には人的交流も含まれるが、例えば浙江大学の副学長鄭強教授は、貴州大学の学長を４年間務め、同大学の発展を促進した。

このように人材こそ発展における最も重要な要因と言える。日本の京都大学で博士号を取得した鄭強教授は国際的な視野があり、沿海部で実施されている競争システムを西部の大学に導入した。これにより大学の科学研究が活性化し、その成果は地域に還元されている。また、例えば筆者が勤務する貴州民族大学は、貴州省でミャオ族・トン族が居住する黔東南ミャオ族トン族自治州の鎮遠県に対し支援を行っている。私が所属している外国語学院（日本の大学では学部に相当）の例を挙げると、年に教員を1名ずつ任期1年で、

鎮遠県の農村に派遣し、その村の党支部書記（公的機関の実質的な最高責任者）を務めている。鎮遠県には、河と山に挟まれた古い街並みで知られる鎮遠古鎮もある。同県農村の発展に資する方策を考えることが、党支部書記には求められているのである。

貴州の発展に日本の先例が参考になったこともある。例えば、故人となられたが、平松守彦元大分県知事が考案した一村一品運動は貴州の大地に着実に根を下ろしている。この運動に倣い、修文県のキウイ、都匀市の毛尖茶、威寧イ族回族ミャオ族自治県のハムなどが優良産品として、全国に知られるようになった。

●ファーウェイ創業者の「衣錦還郷」

ファーウェイは中国を代表するＩＴ企業の１つであり、皮肉なことに昨今のアメリカの制裁により世界的にも知られるようになった。このファーウェイの創業者である任正非総裁が貴州出身である。「衣錦還郷」は、「故郷へ錦を飾る」という意の四字熟語であるが、任総裁も貴州の発展に貢献している。

２０１６年11月に貴州を視察した際には、現地政府と協議し、国家レベルの開発区である貴安新区にファーウェイ初のグローバル・クラウド・データセンターを設立することとした。同センターは２０２１年９月に竣工し、稼働開始した。ファーウェイは２０１９年、２０２０年にも貴州で相次いで関連会社を設立している。

加えて、ファーウェイは貴州財経大学、貴州理工学院といった現地の大学とも協議し、双方は科学技術の共同開発、ビッグデータの実験、スマート・キャンパスや人材育成などで協力しているのである。

貴陽市貴安新区に位置するファーウェイ・グローバル・クラウド・データセンターの全景

●貴州発展のカギは教育にあり

発展における最重要要素が人材であることはすでに述べたが、教育の質の低さは交通事情と相まって、長らく貴州発展の制約要因となってきた。

貴州の日本語教育を例に挙げるならば、初めて本格的に日本語教育が開始されたのは１９７９年に貴州大学においてであった。筆者の在籍校である貴州民族大学は、貴州大学に続いて貴州で２番目に日本語教育を開始したのだが、これも２００４年のことであり、日本語教育の歴史は長くない。

沿海部や、重慶・四川といった内陸部だが経済が発展した都市、さらには海外である日本と貴州との関係は、いずれも緊密ではない。必然的に、貴州に進出する日系企業も少なくなる。このような背景もあり、日本語を学ぶ学生たちは就職で頭を悩ませることになり、常に不安を抱えている。さて、いかにして学生たちのやる気を刺激するか。私が思いついたのが、貴州出身で日本に縁のある先賢、謝六逸の歩みを伝えることであった。

謝六逸は１８９８年に貴陽で生まれ、19歳のとき官費留学生試験に合格、早稲田大学に入学した。早稲田で法律・政治を学んだ後、自分の趣味であった日本文学に傾倒し、母国へ日本文学を体系的に紹介するようになった。日本で『日本文学史』などの著作を出版すると、中国帰国後には上海の復旦大学で新聞学部を創設したのである。

清朝末期からの激動の最中にあって、学究の多くは「急功近利」、すなわち目先の利益を追い求め、腰を据えて日本文学研究に取り組もうとしなかった。だが、謝六逸は日本人および日本社会を知る窓口として日本文学の研究に没頭したのである。

●続け、若者たちよ

気候風土が異なれば人もまた異なる。山高く、森深い貴州は長らく流刑地であった。結果として経済や文化は発展せず、現地の人々の考えも遅れていた。ミャオ族と漢族が領土を巡って争い、敗れたミャオ族は密林の奥に逃げ、そこで暮らすという歴史もあった。

中国の省の中では唯一平野がないことは前述したが、約17万平方キロメートルの土地が約3千8百万の人口を養っている。近年の交通の発達により、この僻地に住む学生たちも頻繁に都市に出かけるようになった。彼らは、自らを育んだこの地に愛着を抱く一方、時には外部の空気に触れたくもなる。

私は、彼らが外界に飛び込んでいくことを望んでいる。異なる文化に触れ、故郷とそれ以外の地域との違いを見聞してほしい。経験を積み、見識を高め、いずれは故郷の発展に貢献することを強く勧めるものである。純朴で善良な学生たちも、師の教えを真摯に受け止め、手探りではあるが外の世界に踏み出していっている。

日本文学史の授業でも、これら学生たちにいかにして日本文学、例えば俳句などを理解させるか試行錯誤している。具体的には、日中比較文学の手法を用いている。俳句、さらには和歌などの日本文学を取り上げ、それらと漢詩を比較するならば、漢詩の日本文学に対する影響がうかがえるのだ。

文学を味わうためには、生活や人生に対する想像力が欠かせない。学生たちの多くは、貴州を出たことがなく、大学生活以外の社会経験も乏しい。であるならば、自国文学を理解することも容易でなく、まして異邦のそれであれば、いっそう困難であろう。

文学、中でも俳句、和歌、詩に対する理解も容易ではないが、それらは人間の歩みや、それに対する思いを感情的に表現している。国が異なっても、人はみな喜怒哀楽を持っている。日本の人々の多くが漢詩を愛好しているように、中国人が日本の詩や俳句など文学を嗜むこともできるはずである。

そう考えた私は、例えば日本の俳句に対し私なりの解釈を加えて、学生に紹介することにした。文学を通じて日本を理解しようとするならば、日本人の感情表現の在り方や、いかなることが日本人の心の琴線に触れるのか、これらを知るべきであろう。

ここで、日本文学史の授業で、謝六逸訳の芭蕉の俳句を学生と一緒に鑑賞した場面を紹介したい。

「旅に病んで夢は枯野をかけ廻る」

この句は芭蕉が、亡くなる４日前に詠んだ代表的な作品である。病身の芭蕉は、生気のない枯れた原野を走るという夢を見たのであった。芭蕉は、旅の途中であったが、大阪で病に臥してしまった。だが、漂泊を好んだ芭蕉は、夢の中でさえ旅するのであった。だが、このとき芭蕉は当時の江戸時代では平均寿命に達していた。彼自身も、この寂しい夢が人生の終焉を暗示していると感じたかもしれない。

私は、この句が訳者の謝六逸の心にも大きく響いたと予想している。彼の人生は順風満帆とはいかなかった。日中戦争の勃発後、戦乱の上海を避け、妻子を連れて貴州に戻ったが、社会の混乱はこの地に及んでいた。物価の高騰はひどく、謝六逸は大夏大学、貴州大学、貴陽師院の各校で教壇に立ち、さらには文通書局の編集者も務めた。それにもかかわらず、暮らしぶりは糊口をしのぐ程度であった。

さらに、悲しいかな、かつて上海の文壇で脚光を浴びていた謝六逸にとって貴陽の文化・教育水準は満足のいくものではなかった。活躍の舞台がなく、心通わせることのできる親友もいなかった。戦争という国難の中で孤独、苦悩に苛まれ、貧困にあえいでいた彼は、ついに病に命を奪われた。１９４５年、47歳という若さであった。

謝六逸の人生と、松尾芭蕉のそれとを比べると前者の方が薄幸だろう。だが、病のせいで、やりたいことができなくなったという点では相通じるものがある。訳者の作者への思いを推測することの重要性を学生に伝え、理解の助けになればというのが私の狙いであった。

芭蕉の他の句も授業で紹介している。

「枯れ朶に烏のとまりけり秋の暮」

この句に出てくる枯枝、カラス、暮秋からは、寂しげな荒涼とした景色が思い浮かぶ。中国でも元朝初期に馬致遠という劇作家が、枯れた藤、古木、カラスを用いて、この句と似たような哀愁を醸し出す詩を書いている。もちろん、馬致遠の詩に比べて芭蕉の俳句は短い。それでも、読み手が双方を深く味わうならば「人生に孤独という帳が下りてきた」、こんな感傷を抱くのではなかろうか。

３つめに、春の生気に作者の哀愁を投影した句を挙げたい。

「行く春や鳥啼き魚の目は涙」

春は万物が蠢動し、希望に満ちた時期である。だが、そのときはいずれ過ぎ去るものであり、漲った生命も萎んでいく、そんな対比を短い句に込めたのであろうか。

この句を詠んだ当時、芭蕉は45歳であった。この頃に、千住から東北に向けて奥州街道を歩んでいく２４００キロの旅を始めたのであった。見送りに来た友人との別離を惜しんだ。

一方、中国では杜甫の春望詩に「時に感じては花にも涙をそそぎ、別れを恨んで鳥にも心を驚かす」というくだりがある。安禄山の乱で長安が灰燼に帰し、亡国の悲しみを抱えた杜甫には、鳥のさえずりさえも、悲鳴に聞こえてしまう。花も本来ならば、その美しさに心癒やされるものだが、今は涙が零れてきてしまう。花や鳥といった美や飛躍を感じさせるものに悲しみを込め

た点に、この漢詩の素晴らしさがある。

芭蕉の句に戻ると、魚は水中を泳いでいるのだから、涙を流しているかどうかなど分かるわけがない。だが、友との別れを、春の過ぎ去りと重ね合わせたのか。芭蕉は己の哀惜を花や魚といった自然に投影し、句を詠んだのである。謝六逸も芭蕉の句に大いに感銘を受け、中国に紹介したことだろう。

最後に、明るい雰囲気の句を紹介したい。

「花の雲鐘は上野か浅草か」

この句を詠んだ当時、芭蕉は江戸の深川に住んでいたが、その頃は視界を遮るような高層の建物はなかった。遥か彼方に緋色の雲のように桜が咲いている。また鐘の音は、その頃日々の時間を知らせる時報のようなものであり、現代のように大晦日にだけ鳴るものではなかった。

深川は上野からも、浅草からも3里（約12キロ）しか離れていないが、上野の寛永寺か、あるいは浅草寺からの鐘の音か。はたまた、2か所の寺の鐘が共に鳴っているのであろう。鐘の音がゆったりと響きわたる様が想像され、安らぎの境地が感じられる。

謝六逸が生きた時代は、戦乱が絶えず、政情も混沌としていた。渦に巻き込まれるように生きてきた彼は、この句から連想されるような、泰平の世を待望していたのではないか。

●日本語で味わう貴州の少数民族文化

貴州は雨が多く、草木は青々としており、空気も新鮮である。特に貴州民族大学が位置する花渓区は、その名の通り、美しい川が流れ、春には桃とスモモが花開く。地域は市民の憩いの場ともなっている。大学は高台に位置しているので、清らかな川や、帽子が並んだような幻想的な山並みを眺めることができる。静かで心安らぐ、勉学にもうってつけの場であると言えよう。

貴州民族大学の本部ビルから雨に煙る花々や連山を眺める

また、大学周辺にはプイ族の村が点在しており、民族衣装を着た老婦人の姿を見かけることがある。このプイ族文化への敬意を込め、大学の本部ビルの色は水色になったそうである。また、同建物建設の際にはその3分の2が円借款により賄われており、日本との縁が感じられる。

このビルは、4本の大きな柱で支えられているが、それぞれ異なる4つの少数民族の文字が彫られている。代々貴州に暮らしてきたこれら少数民族の歩みを記念したものである。

多彩な少数民族文化は魅力に満ちている。貴州民族大学の日本語教育課程には、実は少数民族文化を学ぶ授業がある。この授業を通じて、学生は、貴州の少数民族文化が日本語でいかに紹介されているか、知ることができる。

百年前に著された日本を代表する人類学者鳥居龍蔵博士の貴州民族誌や、近年における慶應義塾大学の鈴木正崇教授の『ミャオ族の歴史と文化の動態――中国南部山地民の想像力の変容』も、貴州を紹介する大変良い資料であり、授業で学生と共に学んだ。

鈴木先生は上記著作でミャオ族の原風景を以下のように紹介している。

「夕暮れ時には沢山の人が伐採や耕作を終えて山からおりてくる。背後の山から子供たちが放牧していた水牛を連れ帰る。稲藁を背負って下ってくる子供、薪や飼料の草を天秤で担いだ女性たちが降りてくる。

夕方は、女性が再び井戸へ水汲みにいき炊事する時間でもある。夕餉の煙が各家の屋根から湯気のように立ち上がる頃に、濃い闇が迫って来る。夜がふける前に女性たちは再度、井戸に水汲みに行く。

月光の下、シャンシャンと銀の飾りの音をさせながら田圃のあぜを歩く女性たち、その背後に点々と明かりがつく村々がぼんやりと広がり、どこからともなく蘆笙の音声が響いてくる」。

また、ミャオ族の恋愛物語についての描写も心ときめかせるものである。

「女の子は身につけていた青い布を贈ると同時に男性の親指の爪の付け根に、自分の爪をたてて血が出るまで強く押しつけて傷つけたという。これは痛みに託して、心も痛むように、そして一生忘れられないようにするための印である（時には歯でかんだりすることもあるという）。

２人は涙を流して別れを惜しんだ。足に結ぶ青い布を、結婚する前の女の子からもらうのはたいへんに難しいとされているという。特に、体の下に身につけるものを与える場合は、特別の気持ちが籠められるとされる」。（同上２５８～２５９頁）

とはいえ、鈴木先生の取材も20～30年前のことである。授業中、ミャオ族の学生さんに「このような経験をしたり、あるいは言い伝えを聞いたりしたことがあるかい」と尋ねたが、「一度もないですよ」という期待外れな返事が返ってきた。商品経済の浸透が、ミャオ族の若者の恋愛文化を変えてしまったのかもしれないと、少しがっかりした。

私は、かくも民族の風情が濃厚な貴州で、日本語教育に従事している。コロナ禍の早期収束が望まれる。貴州の友人に訪日を勧め、日本の風情を味わってほしい。日本の友人には、貴州に足を運び、山水を満喫し、多彩な民族文化に触れてほしい。そんな日々が一日も早く来ることを、願ってやまない。

（２０２２年12月22日、公開オンライン講演会）

筆者略歴（リ　カイ）

１９８２年中国四川省生まれ。２００１年10月に日本に留学し、２０１４年名古屋大学から文学博士号を授与。香港メディアの東京支局長を経て、２０１９年９月中国に帰国し、貴州民族大学外国語学院（日本語）に勤務。アジアユーラシア総研運営委員、全日本中国人博士協会常務副会長。著書に『日本亡命期の梁啓超』、訳書に『王蒙先生論語を語る』『中国外交論』などがある。

公開講演会記録

台湾海峡危機を煽るＮＨＫ
――政権の意向に従う公共放送と世論誘導

ジャーナリスト　長井　暁

はじめに

日中国交正常化50周年にあたる２０２２年９月、ＮＨＫは両国関係を正面から扱うＮＨＫスペシャルを放送しなかった。本来ならば緊張する台湾海峡の問題について、その歴史的経緯を正面から取り上げる周年番組を放送すべきであったろう。近年のＮＨＫの放送現場におけるこうした劣化の原因は、官邸によるＮＨＫ支配が強まったことと関係がある。安倍・菅政権のもとでＮＨＫの最高機関である経営委員会の委員が恣意的に任命され、経営委員会が任命するＮＨＫ会長には安倍氏を応援する財界人の会のメンバーが次々と就任した。その中で放送現場への介入も顕在化し、政権に不都合な事実はなるべく放送せず、政権が進める政策を後押しするような放送が繰り返されている。こうしたＮＨＫの、政権に追従する姿勢が続いた場合、「防衛力の強化・敵基地攻撃能力の保有は当然」という世論を形成するために、中国の軍事力の脅威をことさら強調し、国民の危機意識を煽るようなニュースや番組が繰り返し放送される危険性がある。

１　日中国交正常化周年番組に見るＮＨＫの劣化

日中国交正常化20周年（１９９２年９月）

日中国交正常化20周年にあたる１９９２年９月、ＮＨＫはＮＨＫスペシャル「周恩来の選択―日中国交正常化はこうして実現した―」を放送した。ディレクターを務めた私は、姫鵬飛、韓念竜、張香山、王国権、肖尚前、孫平化、劉徳有、丁民、王効賢といった中国側の交渉の当事者へのインタビューを実施した。また、中国の内部文書や、

中国の記録映画「田中角栄総理大臣の訪中を歓迎する」（カラー全6巻）などを入手した。この番組ではそうした要素を構成して、日中国交正常化を主に中国側からの視点で描こうとした。

日中のパイプ役を担った公明党の竹入義勝委員長と周恩来首相の会談（7月）について張香山氏（外交部顧問）は、「竹入先生との会談が終わるたびに、周総理はその日の会談の内容と問題点をわれわれに伝えました。その後、毛主席にも報告し、話し合われたいくつかの問題について、毛主席の指示を仰いでいました」と語った。この時の周恩来首相との会談を記録した、「竹入メモ」を読んだ田中角栄首相は訪中を決断する。田中訪中が決まると、中国国内では人々への説得工作が開始される。その時に中央から出された「指示書・なぜ田中総理を招請するのか」には、「米国、ソ連の両覇権主義国に反対する闘争に有利である。特にソ連修正主義に反対する闘争に有利である」と記されている。また「指示書・まじめに準備し、田中一行への対応を立派に成し遂げよう」には、「深い恨みはいつまでも忘れがたい。日の丸を見ると腹が立つ。それなのに、なぜ日本の首相を中国に招くのか、納得できないという人もいるだろう。このような気持ちはよく理解できる。日本軍国主義が中国を何十年にもわたって侵略し、中国人民に災難をもたらした。この歴史は忘れてはならない。しかし、我々は感情で政策を決めてはならない」と記されている。

1972年9月25日に田中首相が訪中した。交渉の懸案は、共同声明の中に過去の不幸な歴史をどのように書き込むか、台湾の問題をどのように扱うかであった。日本側の最大の課題は、1952年に台湾の国民政府との間で結んだ「日華平和条約」を否定することなく、中国との新たな関係を築けるかにあった。訪中1日目（25日）の歓迎宴での田中首相の「ご迷惑」発言が大きな問題となる。姫鵬飛氏（外相）は、「日本は戦争中、中国に極めて大きな損害を与えました。我々は田中総理の歓迎宴での挨拶で、お詫びの言葉が述べられることを願望していました。しかし、彼は中国に『多大な迷惑をかけた』と述べたのです。この『迷惑＝麻煩』という言葉は、中国語では非常に軽いもので、何かちょっとしたことを他人に頼む時に使う言葉でしかないのです。あの時は周恩来総理だけではなく、中国側の参加者全員が『なぜあのような言葉を使ったのか』と怒っていました」と証言した。

訪中2日目（26日）の午後、釣魚台迎賓館で開かれた第2回首脳会談で周恩来首相は「ご迷惑」発言と外務省条約局長の発言を厳しく批判した。交渉は暗礁に乗り上げたかに見えたが、翌27日の万里の長城見学への行き帰りの車中での大平・姫外相会談により解決へと向かう。そして4日目（28日）の交渉で日中が合意に至った。その日の夕方、周恩来首相にはまだ重要な仕事が残っていたという。文革派が多数を占める政治局会議で承認を得ることだった。会議に参加した張香山氏はその様子を、「28日の午後5時過ぎに、周総理は政治局会議に出席しました。

会議ではこれといった異議は唱えられませんでした。なぜなら、毛主席がその場でただちに、共同声明の内容すべてに同意したからです。そのため、政治局で以前は異議を唱えていた『四人組』に連なる多くの人々も、即座に同意したのです」と証言した。番組では、１９７２年の日中国交正常化が、毛沢東主席の強力な指導力があって初めて実現したことが浮き彫りになった。

９月29日に調印された「日中共同声明」の前文には、「戦争状態の終結と日中国交の正常化という両国国民の願望の実現は、両国関係の歴史に新たな一頁を開くこととなろう。日本側は、過去において日本国が戦争を通じて中国国民に重大な損害を与えたことについての責任を痛感し、深く反省する」という一文が入れられた。また、本文の第一条には、「日本国と中華人民共和国との間のこれまでの不正常な状態は、この共同声明が発出される日に終了する」と記された。これにより、中国側は「不正常な状態」とは戦争状態を指すと、日本側は外交関係がなかったことを示すと国民に説明できるようになった。そして調印式のあと、大平外相がプレスセンターで記者会見を行い、日華平和条約の取り扱いについて、「なお、共同声明の中では触れられていないが日中国交正常化の結果として、日華平和条約は存在の意義を失い、終了したものと認められる、というのが日本政府の見解である」と述べたのである。

日中国交正常化30周年（２００２年９月）

国交正常化30周年にあたる２００２年９月、ＮＨＫはＮＨＫスペシャル「中国とどう向きあうか―日中国交正常化から30年―」を放送した。東京と北京のスタジオを衛星中継で結んで、６人のゲストが日中関係の現状とこれからについて議論した。東京のスタジオには出井伸之氏（ソニー会長）、石川好氏（作家）、国分良成氏（慶應義塾大学教授）が、北京のスタジオからは劉積仁氏（東軟集団総裁）、駱為龍氏（中華日本学会副会長）、楊伯江・中国現代国際関係研究所主任が議論に参加した。当時の日中関係は、経済関係は急速に深まる一方で、歴史問題をめぐる軋轢が激しさを増していた。１９９８年に来日した江沢民国家主席が歓迎宴で、「日本の軍国主義が中国を侵略した歴史を正しく認識して、向かい合うことが両国の重要な政策の基礎である」と歴史問題に言及し日本側の反発を呼んだ。また、２００１年８月における小泉純一郎首相の靖国神社参拝に対して中国が激しく反発していた。そのため、番組での議論も歴史問題を強く意識したものとなった。

番組の冒頭、司会の川端義明アナウンサーは、「両国は経済の相互依存を深める一方、中国は強力な競争相手ともなりつつあります。また、歴史認識をめぐる問題がことあるごとに浮かび上がるなど、両国間の課題は山積しています。13億の人口を抱え、急速な発展を続ける21世紀の大国。変貌する中国と日本はどう向き合えば良いのか探ります」と述べた。

歴史問題について駱為龍氏は「歴史認識の問題は政治的基礎。侵略の問題を正しく理解しなければならない」、

出井伸之氏は「政府と国民感情に甚だしいギャップ。日本ほど戦争が嫌いな国はない。独仏のように共同のセレモニーをする必要」、石川好は「だらしないほどの平和主義。戦争を反省している。世代の交代による新しい議論に期待したい」などと述べた。また楊伯江氏は「歴史問題は現実的問題。日本人は失われた10年で自信を失っている。歴史問題が解決できないからといって、関係発展を妨げるべきではない。専門家の共同研究に期待したい」、劉積仁氏は「政府は若者に交流を促進すべき。歴史は客観的に議論すべき」、国分良成氏は「歴史問題が政治的に利用されてきた。中国側はあまりこの問題を引きずり過ぎるべきではない」などと指摘した。

そして議論は後半、多元的な交流（民間・地方自治体）の重要性を強調し、中国脅威論を強調するのではなく、グローバル化の潮流の中でパートナーシップを構築すべきといった方向に進んでいった。駱為龍氏が「アジアに足を置き世界を考え、共通の利益を求めて邁進すべき。問題は避けずに、解決して行かなければならない」、石川好氏が「中国は、中国の外に世界があるという視点ではなく、世界の中に中国があるという視点を持ち、補い合う関係を築くべき」、劉積仁氏が「相互補完すべき。中国には人的資源があり、協力のチャンスがある」、国分良成氏が「世界中が中国問題を心配している。中国は国際社会に入るべき」、出井伸之氏が「日中が中心となり東アジアで共同市場を作るべき。文化的共同体。根っこの部分では繋がっているが違う国という関係がグローバル時代には必要」などと述べた。

日中国交正常化40周年（２０１２年９月）

日中国交正常化40周年にあたる２０１２年９月、ＮＨＫはＮＨＫスペシャル「日中外交はこうして始まった」を放送した。この番組は高崎達之助ら、日中関係の礎を築いた人々の活動を振り返るとともに、同年４月以降の尖閣諸島をめぐる日中関係の緊張、８月以降に中国各地で起きた反日デモを強く意識した内容となった。

日本政府が尖閣諸島を領土とすることを決定したのは１８９５年。戦後はアメリカの施政下におかれ、１９７２年の沖縄返還協定で日本に返還された。一方60年代後半に周辺に石油が埋蔵されている可能性が指摘されると、台湾・中国が領有を主張し始める。１９７２年２月に外務省中国課が発表した尖閣諸島に関する日本政府の見解は、「同諸島がわが国領土であることは議論の余地なき事実」「如何なる国の政府とも話し合う考えはない」というものだった。

１９７２年８月５日に届けられた「竹入メモ」には、「尖閣列島の問題にもふれる必要はありません」という周恩来首相の言葉が記されていた。ところが９月28日に行われた第３回首脳会談で、日中間で話し合わないことになっていた尖閣問題に田中首相がふれたことが、外務省が公開した外交記録から明らかになった。記録によれば田中首相が「尖閣諸島についてどう思うか？　私のところに、いろいろ言って

くる人がいる」と発言。周恩来首相は「尖閣諸島問題については、今回は話したくない。今、これを話すのはよくない。石油が出るから、これが問題になった。石油が出なければ、台湾も米国も問題にしない」と答えたという。なぜこの時田中がこの問題に触れたのか、日本側の関係者はみな首を傾げる。この会談で通訳を務めた王効賢氏に日本側の記録を見せると「確かにそういう話はありました。中国では尖閣列島とは言わない。釣魚島等島嶼」「国交正常化の時は、やりとりはなかった。田中総理がちょっと言ったら、周総理は、この話を今回はしないことにしましょう。先送りしましょう」と証言した。中国側は「問題を一時棚上げしたものだ」としている。

以上見てきたように、日中国交正常化20周年、30周年、40周年に放送された周年のＮＨＫスペシャルは、それぞれの時代の状況を踏まえて、両国がどのように困難な課題を解決してきたかを描き、将来の日中関係を考える材料を視聴者に提供するものだった。

日中国交正常化50周年（２０２２年９月）

日中国交正常化50周年にあたる２０２２年９月、ＮＨＫはＮＨＫスペシャル「中国残留婦人たちの告白―二つの国家のはざまで―」を放送した。この番組は戦後中国に残されていた中国残留婦人37人の２００時間に及ぶ証言映像を元に、ソ連軍による性暴力や、文化大革命の混乱の中での迫害、帰国後の日本社会での冷遇などの、彼女らが歩んだ過酷な人生を描いた。また、日中の内部文書などから、両国の国策の狭間で、彼女たちの帰国が遅れた不条理を浮き彫りにするものだった。この番組自体はとても良い番組であったし、中国残留婦人の問題は忘れてはならない歴史の重要なテーマである。その一方で、10年ごとの周年のＮＨＫスペシャルとして放送する番組に相応しかったかどうかは疑問である。

昨年、中国をめぐっては、「香港国家安全維持法」施行と民主派の取締り、新疆ウイグル自治区でのウイグル人弾圧などにより、国際社会の中国を見る目は厳しさを増していた。そうした中で２０２２年８月には、ペロシ下院議長の台湾訪問に反発した中国が台湾周辺で軍事演習の実施、台湾をめぐる米中関係の悪化・軍事的な緊張が高まっていた。そうした中でＮＨＫニュースは中国の台湾周辺での軍事演習、その際の日本のＥＥＺへのミサイル着弾など、現在の出来事のみを報道し続けた。歴史的な経緯を知らない日本の視聴者には、こうした中国の対応は一方的に横暴な行為に見えただろう。そして日本国民の間には中国脅威論、台湾有事への危機感が高まり、岸田政権が進める「防衛力の強化・敵基地攻撃能力の保有」も止むなしというムードが広がりつつあった。

そのような時代の状況の中で、ＮＨＫは日中国交正常化50周年のＮＨＫスペシャルで、中国がペロシ下院議長の台湾訪問になぜ過剰に反発するのか、その理由を考える材料を視聴者に提供する番組、つまり中国が主張する「一つの中国の原則」が、米中間、日中間でどのように話し合われ、処理されて

きたのかを描く番組を放送すべきであった。

１９７２年２月の米中接近、９月の日中国交正常化の時、米国と日本はこの「一つの中国の原則」を基本的に受け入れることで、中国との関係改善に踏み切ったのである。「米中上海コミュニケ」では、中国側が「一つの中国の原則」を強く主張したのに対し米国側は、「米国は、台湾海峡の両側のすべての中国人が、中国はただ一つであり、台湾は中国の一部分であると主張していることを認識している。米国政府は、この立場に異論をとなえない。米国政府は、中国人自らによる台湾問題の平和的解決についての米国政府の関心を再確認する」と主張したのである。

９月の「日中共同声明」でも、「中華人民共和国政府は、台湾が中華人民共和国の領土の不可分の一部であることを重ねて表明する。日本国政府は、この中華人民共和国政府の立場を十分理解し、尊重し、ポツダム宣言第八項に基づく立場を堅持する」と記されたのである。この「日中共同声明」はその後の日中関係の基礎となり、そのことは現在も変わっていない。日中国交正常化50周年の周年ＮＨＫスペシャルでは、当然、台湾問題をめぐる米中・日中の交渉の経緯を振り返り、視聴者に日本がこの問題にこれからどのように向き合っていくべきかを考える材料を日本の視聴者に提供すべきであった。しかし、ＮＨＫはそうした役割を完全に放棄してしまった。

2　安倍・菅政権下で進んだ政府のＮＨＫ支配

こうしたＮＨＫの放送現場の劣化はなぜ生まれたのだろうか？　それは第１次安倍政権の時に始まった、政府・与党によるＮＨＫ支配の強化と関係がある。安倍政権がＮＨＫを支配するために目をつけたのが、ＮＨＫ経営委員会だった。12人の委員からなるＮＨＫ経営委員会は、ＮＨＫ会長を選任し、経営方針などの重要な事項を決議するＮＨＫの最高意思決定機関である。以前は総務省の官僚が地域のバランスと職域のバランスを考慮して作成した候補者リストにもとづき、内閣総理大臣がそのまま任命するのが慣例だった。それが変容したのは、２００７年６月に第１次安倍内閣で、菅総務相と安倍首相が相談して、古森重隆氏（富士フィルムホールディングス社長）を恣意的に委員に任命し、いきなり委員長に据えたのが始まりだった。古森氏は、ＪＲ東海社長（後に会長）の葛西敬之氏が幹事役を務めて発足した、安倍晋三氏を囲む財界人の集まり「四季の会」の主要メンバーだった。２００８年１月には古森経営委員長のもとで、やはり「四季の会」のメンバーだった福地茂雄氏（アサヒビール元会長）がＮＨＫ会長に就任する。福地会長は１期３年での退任を表明していたため、２０１１年には再び会長人事が発生した。この時の経営委員長・小丸成洋氏（福山運輸社長）は「四季の会」とは関係のない人物だったが、後任人事を前委員長の古森氏に相談したことから、葛西氏の部下だった松本正之氏（ＪＲ東海副会長）がＮＨＫ会長に就任することに

なったという。

２０１３年７月の参院選で自民党が圧勝してねじれ国会が解消すると、安倍政権はさらに恣意的にＮＨＫ経営委員を任命する。安倍氏の元家庭教師、「安倍首相を求める民間人有志による緊急声明」の発起人の作家や大学名誉教授など４人が新任され、委員長には「四季の会」のメンバーの石原進氏（ＪＲ九州会長）が就任した。この経営委員会によって２０１４年１月に籾井勝人氏（三井物産元副社長）がＮＨＫ会長に就任する。籾井氏が就任初日の記者会見で、「政府が右と言っているものを、われわれが左と言うわけにはいかない」「（慰安婦は）戦争をしているどの国にもあったでしょうということですよ」などと、問題発言を連発し、世間を唖然とさせた。その後も、ＮＨＫの経営委員長と会長は、「四季の会」のメンバーか、その周辺の財界人でたらい回しにされてきた。この１月まで会長を務めた前田晃伸氏（みずほフィナンシャルグループ元会長）も「四季の会」のメンバーだった。

前田会長のもとでＮＨＫは、コロナ禍での開催に国民の間に多くの異論がある中で、東京五輪の開催を強行し、大会の盛り上がりを政権浮揚につなげようとする菅義偉政権の意向に沿う形での放送を繰り返した。２０２１年１月15日には、２日後に予定されていたＮＨＫスペシャル「令和未来会議　どうする？　何のため？　今こそ問う東京五輪パラ」（１月24日放送予定）のスタジオ収録を放送総局長が中止させ、放送が延期されるという事件が起こる。出演者はリモートも含め１００人を超えていたため、現場は大混乱に陥った。この事件の背景には、１月14日にＮＨＫにもたらされた、「森喜朗・東京五輪組織委員会会長が、ＮＨＫの世論調査のニュースに怒っている」という情報があった。１月13日、ＮＨＫニュースは「五輪・パラの延期・中止を求める意見が77％になった」というＮＨＫ世論調査の結果を伝えていた。これを受けて、ＮＨＫは２月の世論調査の「五輪・パラ」項目の質問と選択肢を大幅に変更し、あたかも開催に賛成が、中止を上回っているかのような調査結果を導き出した。さらに、４月１日には聖火リレー中継から、沿道から「オリンピックに反対」の市民の声が聞こえた途端に音声を消去した。大会期間中は、ニュースの放送時間を大幅に縮小してまで、五輪中継一辺倒の放送を実施した。そして日本選手がメダルを獲得するたびに、「ＮＨＫニュース速報」でけたたましく伝え、大会の盛り上がりを演出し続けたのである。

３　政権追従のＮＨＫ台湾海峡危機報道

菅政権が強行に押し進めた東京五輪開催へのＮＨＫの協力ぶりを見ると、今後の日本の将来を左右するような重大な決定に、ＮＨＫが政権の意向に従う形で影響を与える可能性を危惧せざるをえない。

岸田文雄政権は昨年12月、安全保障政策と、防衛費の水準を見直す３文書（国家安全保障戦略、国家防衛戦略、

防衛力整備計画）の改定を閣議決定した。

そうした政権の動きを後押しするように、ＮＨＫは中国の軍事的脅威の増大と、台湾有事の可能性を強調するニュースを放送してきた。一方、ＮＨＫスペシャル「シリーズ混迷の世紀」などの番組は、まだ抑制的に伝えている。しかし、もし番組までが中国の脅威をことさら強調するものを放送するようになれば、世論は一気に「防衛力の強化」を容認する方向に傾きかねない。

ＮＨＫはすでに２０２１年12月に、そのようなＮＨＫスペシャル「台湾海峡で何が―米中〝新冷戦〟と日本―」を放送している。この番組の問題点は、台湾有事の危険性を強調するアメリカと中国のタカ派の論客の意見を、あたかも両国の代表的な意見のように紹介している点にある。アメリカからは前米インド太平洋司令官のフィリップ・デービッドソン氏が登場し、「数十年にわたって人民解放軍の近代化により、台湾海峡での軍事的バランスが大きく変わり、抑止力が危険なまでに低下している」「台湾は野望の一つであり今後６年以降に脅威が明白になる」と語る。一方で中国からは中国国防大学の劉明福教授が登場し、「（祖国統一は）習近平の新時代に必ずやり遂げなければならない」「中国の国力がアメリカを超えるまでに、それほど時間はかからないだろう」と述べる。番組では自衛艦「おうみ」が米駆逐艦「デューイ」へ燃料を補給する映像に、「５年前の安全保障関連法の制定により、警戒監視にあたっているアメリカ軍に対し、平時から補給ができるようになったのです」、「かつてないほど進んでいる日米の一体化。今後、同盟国日本の役割が増していくと指摘します」とのナレーションで説明した上で、ランド研究所のジェフリー・ホーナン上級研究員に、「アメリカが紛争に巻き込まれ、日本が攻撃されていない段階で日本が何をするのか。アメリカの戦略にどう価値を加え、戦力の増強につなげられるか、具体化していく必要がある」と語らせている。その上で番組では、２０２１年８月にシンクタンク「日本戦略研究フォーラム」の呼びかけで開催された「台湾有事机上演習」の模様を詳しく伝えている。この試みを「あくまでも外交による平和的解決をめざす日本。しかし、万が一どのような対応を迫られるのか。政府とは別の立場で独自に検証しようとしていました」と紹介したが、「日本戦略研究フォーラム」が防衛省・自衛隊と繋がりがあるシンクタンクであることは、参加者に自衛隊関係者が多いことからも明らかだ。「台湾有事机上演習」の参加者は、浜田靖一（衆議院議員）、細野豪志（衆議院議員）、長島昭久（衆議院議員）、住田和明（元自衛隊陸将）、石井正丈（元外務省国際法局長）、兼平信克（元国家安全保障局次長）、岩田清文（元自衛隊陸上幕僚長）、武居智久（元自衛隊海上幕僚長）である。この参加者を番組は、「参加したのは安全保障関連法の制定に係るなど、最近まで日本の安全保障政策の中枢にいた元官僚や自衛隊の元最高幹部です」と紹介した。こうした台湾有事への危機感を煽るような番組をＮＨＫが繰り返し放送するようになれば、世論は「防衛力の強化・日

米の軍事一体化」の容認に一気に傾く可能性がある。

国民のテレビ離れ、影響力の低下が言われて久しいが、まだまだＮＨＫのニュース・番組の中高年層への影響には大きなものがある。それが政府に利用された時、世論形成に大きな力を持つことは、ロシア国営テレビのプロパガンダ放送によって、ロシア国民の多くが、プーチン大統領が主張する「ウクライナへの特別軍事行動」を正当なものと信じている事実からも明らかである。ノーベル賞受賞作家であるスヴェトラーナ・アレクシエーヴィッチはＮＨＫの番組の中で、「テレビによる支配力がとても大きいです。ロシア国民はテレビを全て信じているかのようです」と語っている。

ＮＨＫは近年、中国や北朝鮮の軍事的脅威を強調するニュースを繰り返し放送してきた。特に北朝鮮がミサイル発射するとニューストップ項目で長時間放送し、Ｊアラート（全国瞬時警報システム）が配信されると、番組を中断して延々とニュースを流し続けてきた。昨年からは台湾海峡の危機、中国の軍事的脅威を強調するニュースが目立つようになっている。

もし、「防衛費の大幅増額・敵基地攻撃能力の保有」などを目指す政権の意向に沿う形でＮＨＫスペシャルなどの番組放送が行われるようになれば、政権が進める政策の良し悪しを国民が冷静に判断できなくなってしまう危険性がある。このまま日米の軍事一体化が既成事実化されていけば、なし崩し的に「台湾有事＝日本有事」になるような状況が生まれるだろう。重要なのは「どうやって戦争を起こさせないようにするか」である。そこでは節度ある防衛力の増強によって抑止力を強化する必要もあるかもしれないが、さらに重要なことは、中国との対話の努力、日本の外交力の増強ではないだろうか。

（２０２３年１月23日、公開講演会）

筆者略歴（ながい　さとる）

ジャーナリスト（元ＮＨＫチーフ・プロデューサー）、学習院大学・聖心女子大学非常勤講師。１９６２年東京都で生まれる。１９８１年東京都立武蔵高等学校卒業。１９８１年東京学芸大学教育学部入学。１９８３年中国北京大学歴史系留学。１９８７年東京学芸大学教育学部卒業。１９８７年ＮＨＫ入局、番組制作局（社会教養部）ディレクター。張学良氏へのインタビューに成功するなど、ディレクターとして数多くのＮＨＫスペシャルなどの番組の制作を手がける。１９９６年大阪放送局（文化部）デスク、２００３年番組制作局（文化福祉番組部）チーフ・プロデューサー。２００５年、２００１年に放送されたＥＴＶ２００１「戦争をどう裁くか②問われる戦時性暴力」が、政治家からの圧力により改変されたことを内部告発。２００６年放送文化研究所・主任研究員、２００９年ＮＨＫ退職。以後、東京大学大学院など、多くの大学で教鞭をとりながら、ジャーナリストとしても活動。ＮＨＫ問題を中心に、新聞・雑誌などで発言している。

反中・嫌中への分水嶺を作った一冊の本

―名存実亡の田中角栄・周恩来共同声明

横浜市立大学名誉教授　矢吹　晋（会員）

昨年秋は田中角栄・周恩来共同声明以来、半世紀の日中関係を顧みるいくつかのイベントが行われたが、はなはだしく盛り上がりを欠いたものであった。「台湾有事」なる得体のしれない幽霊が人々にとりつき、中国を含む仮想敵に対する先制攻撃が論じられて「日中不再戦」の誓いは、雲散霧消したように見える。過去半世紀にわたって日中関係を見つめてきた老生にとって、不安は尽きない。日中関係はどこでボタンを掛け違えたのか。

手元に一冊の本がある。服部龍二著『日中国交正常化』（中公新書、２０１１年）である。これは２０１２年の田中訪中40年を記念して、その前夜に歴史を顧みて発表された。まことに時宜を得たテーマであるから、早速一読したが、深い失望を感じないわけにはいかなかった。「田中角栄、大平正芳、官僚たちの挑戦」というサブタイトルが付されている。遺憾ながら、本書は「官僚たちの挑戦」という自画自讃に終始して、田中や大平の肉声は抹殺された。帯封には「本当の政治主導とは」と書かれていたが、私は「本当の官僚主導とは」と誤読したほどだ。その後、一連の驚くべき事態が続いて私は茫然とした。

なんと本書が毎日新聞の呼びかけで設立されアジア調査会の設けたアジア太平洋特別賞を得たかと思うと、重ねて朝日新聞が創設した大佛次郎論壇賞を得たのだ。前者の会長は栗山尚一元アメリカ大使（田中訪中時は条約課長）である。官僚礼讃の手前味噌にみずから賞を与えたとしても、ご愛嬌と一笑に付すべきかもしれない。ところが、大佛次郎論壇賞の審査委員諸氏は、佐々木毅元東大総長、山室信一京大教授、橘木俊詔同志社大教授、米本昌平東大特任教授、朝日新聞論説主幹大軒由敬

等、日本を代表する識者と見られている人々だ。たとえ愚作・駄作だとしても、ここまで持ち上げられると、もはや一人歩きして、この本に書かれた誤謬の数々が〈定説〉になっては困る。私の懸念は果して杞憂ではなかった。その後10年、日中関係は年を追って悪化し、今日を迎えた。

何が問題か。服部の「第11回大佛次郎論壇賞受賞」記念のエッセイから、3つのキーワードを選ぶ。まず、チャイナ・スクール外し、次いで尖閣諸島問題、最後に、日中講和の精神、である（『朝日新聞』2011年12月22日）。講和の精神を説いて、服部はいう。「日本人はあの戦争を忘れないし、そのことを前提に中国人は寛容の心で日本と向き合う。そして日中両国は、ともに善隣友好関係を築いていく。それが日中講和の精神ではなかろうか」。これは一見、優れた見識に見える。では、服部は、前掲書で「日中講和の精神」をどのように描いたか。いうまでもなく田中角栄・周恩来会談のハイライトは、1972年9月26日午後に行なわれた第2回首脳会談である。冒頭、周恩来は、前夜の田中挨拶の一句「ご迷惑」に触れてこう批判した。「田中首相の『中国人民に迷惑をかけた』との言葉は中国人の反感をよぶ。中国では迷惑とは小さなことにしか使われないからである」。このシーンを服部は、こう描く。「その模様を橋本は、「（周総理は）怒髪天をつかんばかりの怒り方だったですからね。大平さんは一瞬蒼くなっちゃった」と述べる」。服部はこう続ける。「スピーチを酷評された田中は、言い返さなかったのか。日本外務省の記録には出てこないが、田中は「ご迷惑」を周に批判されると、その場で言い返していた。田中自身が、次のように述べたと記している」と。日本外務省記録には出てこないがと、服部は、あっさり片づけるが、日本外務省記録には出てこない事実の重みが服部にはまるで理解できていない。

服部は続けてこう書く。「その場にいた橋本に確認したところ、「『ご迷惑』発言については、〔田中自身が〕周発言の直後にちゃんとやりましたよ」とのことだった」と記述し、その典拠として、服部自身による「橋本へのインタビュー2008年11月8日」を挙げている。これはきわめて重大な証言なのだが、その深刻な意味に服部は気づいていない。なぜ重大なのか。「その場にいた橋本」は、外務省首脳会談の記録に残す義務を負うからだ。にもかかわらず、その後情報開示によって明らかにされた記録には、この部分が削除されている。誰がなぜ削除したのか。それは許される行為か。公的記録の改竄ではないのか。

後に外務省が情報開示した記録によると、田中は「大筋において周総理の話はよく理解できる」と述べたことになっている。「怒髪天をつかんばかりの怒り方」をした周恩来発言に対して、田中が「大筋においてよく理解できる」と答えたとは到底信じられない。この記録は修正・改竄が行われているに違いないと確信して、調査を始めた。2010年代初頭、折からの小泉首相による靖国参拝と江沢民主席による反日政策のもとで日中関係が急速に悪化し

ていたときだ。私は、まず田中の帰国後の一連の発言を可能な限り集め、ついで中国に出向いて、中共中央文献・党史研究院を訪ねて、日本外務省記録で削除された部分の復元を試みた。その内容を、私は春の定年を前にして、２００４年１月26日横浜市立大学最終講義で「日中誤解は迷惑に始まる」と題して講義した。

その中国語訳は「田中角栄与毛沢東談判的真相」のタイトルで『百年潮』２００４年２月号に発表され、次いで『新華文摘』２００４年10号に転載された。さらに加筆したものを「田中角栄の「迷惑」、毛沢東の「迷惑」、昭和天皇の「迷惑」」のタイトルで『諸君』２００４年５月号に発表し、その要旨は矢吹の著作選集第４巻『日本―中国―米国、台湾』（未知谷、２０２２年）に収めた。

さて、中共中央文献・党史研究院の陳晋研究員が未公開資料を外国人に閲覧させることはできないが、該当個所を書き抜いた一節として、私に与えた紙片には、こう書かれていた。

• 田中：日本語と中国語とは、言い方が違うのかもしれない。

• 周恩来：訳文が好くないかもしれない。この箇所の英訳は「make trouble」です。

• 田中：迷惑とは、誠心誠意の謝罪を表します。この言い方が中国語として適当かどうかは自信がない。迷惑という言葉の起源は中国だが。

ここで中国側が「誠心誠意の謝罪」と訳した部分の田中の日本語発言は、彼の自民党における報告会での記録によれば、「東洋的に、すべて水に流そうという時、非常に強い気持ちで反省しているというのは、こうでなければならない」と語った可能性がある。あるいは二階堂進官房長官のブリーフィングから推測すれば、「万感の思いを込めておわびするときにも使うのです」と説明、弁明したはずだ。こうして田中・周恩来会談で合意した内容を日中双方が確認したのは、９月27日夜８時の毛沢東書斎における会見であった。ここには田中のほか大平外相・二階堂官房長官のみが招かれ、日本側は通訳も書記もいなかった。会見の模様は、二階堂長官による記者会見のみが唯一の日本側資料である。２０１１年12月22日の情報開示に含まれていたのは、この部分であるが、内容は当時のマスコミ報道と変わりがない。陳晋研究員が示した中国側記録を訳して見よう。

• 毛沢東：あなた方は、あの「添麻煩」問題は、どのように解決しましたか。

• 田中：われわれは中国の習慣にしたがって改めるよう準備しています。

• 毛沢東：一部の女性の同志が不満なのですよ。とりわけ、あのアメリカ人は、ニクソンを代表してものを言うのです。

最後の発言は毛沢東一流のジョークであろう。日本側通訳はいなかったが、毛沢東は日本語通訳２人（林麗韞、王效賢）のほかに、英語通訳も同席させていたことが分かる。いずれにせよ、毛沢東は冒頭、「どのように解決しましたか」と過去形で尋ね、田中が「中国の習慣にしたがって改めるよう準備しています」と答えたのは、一つは共同声明に盛り込む文言を指すであろう

し、また会談記録で、「ご迷惑という日本語部分の中国語訳が不十分ならば、適当な表現を中国側から提起してほしい。それをもって田中自身の謝罪とする」とまで相手側の胸中に踏み込んだ田中の姿勢を説明したものと読める。こうして、田中・周恩来の間で誤解が解け、それを追認するセレモニーが毛沢東の書斎で行われた経緯は、当時の二階堂長官の記者会見等からすでに明らかであった。とすれば、ここで醸成された相互理解こそが「日中講和の精神」と呼ばれるべきであろう。なお、日中のこのやりとりは、『毛沢東年譜』（第6巻、２０１３年12月、４４９頁）にその後、発表された。

以上の文脈を顧みると、その場で言い返していたという服部の表現は、まるで状況にそぐわない過ちだ。ここで田中が「言い返していた」ならば、会談は決裂したに違いない。田中・周恩来会談の急所について、かくも安易な杜撰を行う著者が「日中講和の精神」を語っても、到底素直に受け入れられまい。毛沢東の書斎を辞した後、９月27日夜10時10分から28日午前零時半まで、迎賓館で第３回外相会談、すなわち「最終会談であり、かつ最も重要な会談」が行なわれた。ここで日中共同声明の前文に書かれた文言が確定した。「日本側は、過去において日本国が戦争を通じて中国国民に重大な損害を与えたことについての責任を痛感し、深く反省する」。この経過を『当代中日関係：１９４５―１９９４』は、次のように記述している。この箇所は、大平外相が一字一句口述したもので、これをもって『添了很大的麻煩』の言い方と代替したものである。この記述から分かるように、「責任を痛感し、深く反省する」という表現によって、「たいへんなご迷惑をかけた」という言い方は、置き換えられたと見るのが中国側の見解なのだ。しかも大平外相は、一字一句丁寧に述べたのである。ここには大平の人柄がにじみ出ている。田中訪中直後の１９７２年10月国会における大平外相演説（第70回国会、昭和47年10月28日）で、大平は、次のように信条を吐露している。

「私は、何をおきましても、日中相互の間に不動の信頼がつちかわれなければならないと考えます。われわれはお互いのことばに信をおき、かつ、お互いのことばを行為によって裏書きすることが必要であると思います。（拍手）さらに、両国が、アジア地域の平和と安定、秩序と繁栄に貢献することが肝要であると思います。そのためにわれわれは何を行なうべきか、何を行なってはならないかについて、正しい判断を持ち、慎重に行動すべきであると考えております。日中両国は、このような不動の信頼とけじめのある国交を通じてのみ、両国間に末長き友好関係を築き、発展させることができるものと考えます。政府としてはこのためにせっかく努力をいたす所存であります（拍手）」。（傍線は矢吹による）国交正常化交渉に臨んだ大平の信念はここからも読み取れる。これこそが「日中講和の精神」と呼ぶべきなのだ。橋本が軽々しく「ご迷惑でよい」等と語るのは、信義に悖る。

次に服部のキーワード「尖閣諸島」

はどうか。服部の受賞エッセイはいう。尖閣問題は「そもそも議題にしなかった」「中国は事実上、尖閣諸島を放棄したと見なされてもやむをえない」「国交正常化で主張しなかった領土について、いまさら「中国固有の領土」に組み込もうとするのは不可解」と記す。これまた相当に乱暴な一方的主張であり、これが「日中講和の精神」ならば、いよいよ日中関係は危うい。最後のキーワード「チャイナ・スクール外し」の功罪は、あとで触れる。本書は、日中国交正常化を論じるに際して、栗山尚一や橋本恕の一方的な主張・回顧を書きとめたにすぎず、中国側の対日政策・対日像はほとんど浮かび上がらない。これでは〈中国不在の日中交渉〉にならざるをえない。このような駄作・欠陥商品が、日中国交正常化40周年に出版され、２つの新聞社が持ち上げたことは、日中の相互誤解を促進するおそれが強い。

顧みると、改竄の嚆矢は１９８８年９月外務省中国課が執務資料としてまとめた「日中国交正常化交渉記録」である。その後、情報開示法に基づいて公開された会談記録は、88年にタイプ印刷物に収められたものと同一であり、岩波書店等の資料集に収められたものはこれである。１９７２年の田中訪中から20年を経て、１９９２年には天皇訪中も行われ、日中間の歴史問題はすべて全面的に解決した、と日中双方の関係者が安堵したのは、天皇訪中が成功裏に終わった時であった。かつて青嵐会の闘士として田中訪中反対の急先鋒であった渡辺美智雄は外相として訪中に随行し、20年の歳月の変化を印象づけた。ところがまさに橋本恕が駐中国大使として尽力したとされる天皇訪中の直後から、日中間のさざなみが広まり深まる。最初の一石は「チャイナ・スクール外し」の中国課長として交渉の実務を担当し、その後アジア局長を経て中国大使を務めていた橋本恕の証言であった可能性が強い。

１９９２年９月27日にＮＨＫが放映したテレビ番組で、当時の駐中国大使が田中訪中の往時を回顧して「ご迷惑」という言葉の選択は正しかったと繰り返した。この国交正常化20周年に行われた橋本恕証言は、田中の必死の釈明、あるいは真意説明を帳消しにする役割を果たしたことで、責任はきわめて重い。２つの表現のニュアンスの差異が問題になり、これは「外務省の翻訳間違い」ではないか、と「誤訳の問題」として中国側は処理しようした。

ところが、橋本は、意外にも断じて翻訳の問題ではないと断言してしまった。「迷惑」を「麻煩」と訳したのは、誤訳ではなかったかというＮＨＫ記者の問いかけに対して、橋本は「決して翻訳上の問題ではなく、当時の日本国内の世論に配慮したギリギリの文章であった」と答え、次のように補足した。「私は何日も何日も考え、何回も何回も推敲しました。大げさに言えば、精魂を傾けて書いた文章でした。もちろん大平外務大臣にも田中総理にも事前に何度も見せて、「これでいこう」ということになった」。これはすれ違い問答である。橋本の念頭にあるのは「迷惑」の２文字だけで、その中国語訳ではない。にもかかわらず、誤訳か

否かと問われて、誤訳ではないと橋本は答えてしまった。橋本が大平や田中に対して、訳語の話をした形跡はない。日本語の「迷惑」を基調として挨拶文を書いたという話だけなのだ。記者が問うているのは、日本語の「原文そのもの」ではなく、その中国語訳であるにもかかわらず、聞き手の記者も、答える橋本も、そのすれ違いに気づいていない。これが国交正常化20周年の弛みきった日中関係であった。

橋本がもし原文の推敲に費やしたエネルギーの一割でも、中国語訳文の推敲に費やしていたならば、歴史的誤解は避け得たはずだが、「チャイナ・スクール外し」によって手柄を独占しようとした橋本には、その核心が見えない。こうして橋本は日中誤解を無意識のうちに増幅する基礎を作った。すなわち正常化20周年までは、「田中のご迷惑＝誠心誠意的謝罪」と「橋本のご迷惑＝添麻煩」、２種類の説明が玉虫色で併存していた。しかしＮＨＫ番組における橋本の断定および田中の発言を削除した日中会談記録が流布した結果、田中謝罪が消えて、「橋本流のご迷惑」が日本政府の公式見解に格上げされる結果となった。ＮＨＫは翌１９９３年、番組を活字化して『周恩来の決断』という本を出版し、これは翌94年に中国語訳された。この中国語訳に、日本語原本にはない、姫鵬飛外相の回顧録「飲水不忘掘井人」が付されたが、これは意味深長な付加であった。私自身は、この文章をまとめた李海文さん（中共中央文献・党史研究院研究員）から直接教示を受けて、その意味を調べた。姫鵬飛回想録はその後『周恩来的最後歳月』（中央文献出版社、１９９５年）等に再録され、また張香山、呉学文等、中国側関係者も回想録等の形でこの問題に言及しているので、いまでは中国側の立場はほとんど明確になっている。これらの証言を率然と読むと、問題の所在が分からなくなる。

その後、１９９５年前後から江沢民流の愛国教育運動という形の反日運動が広範に展開されたが、そこで大衆を煽動する口実として最も広く用いられたのが「戦争を謝罪しない日本」という罵倒の決まり文句であった。大平は１９８０年に急逝し、田中も93年に死去したが、もし彼らが存命ならば、中国側の誤解と、誤解へ導いた橋本の解釈を激怒したに違いない。当時、外務省は誤解を解く努力をどのように行ったか、はなはだ疑わしい。会談記録改竄に責任を負う橋本や、栗山のような向米一辺倒の高官が外務省を牛耳るなかで、日中関係の悪化は、日本の防衛力増強、日米安保再強化の口実として悪用された。服部は前掲『朝日』エッセイの冒頭で、日中交渉について、「チャイナ・スクールは排除されていた」としたり顔に書いている。より重要な問題は田中が第２回会談で必死に「万感の思いを込めて」と力説した時点の後で訳語をどのように訂正したかである。田中の「ご迷惑」を「添麻煩」と訳したことが大問題になったことを知る立場にありながら、「〔訳語は〕プラスもしなければ、マイナスもしない。似合った言葉を探してくるほかない」と開き直る。これは外交官の言葉といえるであろうか。今どきのロボットでさえも、

相手の表情を読み取り、言葉を選択するではないか。「ご迷惑」＝「添麻煩」で済むとは、とんでもない開き直りではないか。少なくとも田中が「ご迷惑」＝「誠心誠意的謝罪」と弁明した後では、田中の真意とずれていたことを認めつつ、ただし、翻訳した時点では田中の真意を誤解したと正直に語るのが、最小限の常識ではないか。

毛沢東が田中に『楚辞集注』を贈呈したことについて、さまざまの解釈が行われてきたことは周知の通りである。では「毛は、なぜ田中に『楚辞集注』を贈ったのか」「橋本は、作詩の参考に供するためだったと解する」として、橋本の解釈をこう書いている。「田中さんが詩を作ったり、詩を勉強するのであれば、これがいいだろうと言って、『楚辞集注』を田中さんに詩を作る参考になるようにということで上げた」。田中から毛沢東への土産は、東山魁夷画伯の「春暁」（20号）、周恩来へは杉山寧画伯の「韵」（20号）であった。これに対して毛沢東が『楚辞集注』をお返しとしたことはよく知られていたが、橋本の解釈は「作詩の参考に供するため」というものであり、これは当時の時点で各紙がこの説を紹介し、同時に「もし作詩の参考ならば、『唐詩選』がよりふさわしい。『楚辞集注』はふさわしくない」と見る識者のコメントもしばしば行なわれた。服部は「２００８年11月８日のインタビュー」として、橋本が国交正常化36年後も依然、「作詩参考説」を堅持したことを記している。問題はその典拠である。服部の記述（前掲書、第８章注17）を見ると、「通訳の周斌は、毛が『楚辞集注』をニクソンにも贈っており、他意はなかったと述べている」と解説している。私はこの記述に接してたいへん驚いた。毛が『楚辞集注』をニクソンにも贈ったとする新説は、ありえない。服部が周斌の言として引いているのは、久能靖「角栄・周恩来会談 最後の証言」（『文藝春秋』２００７年）である。久能の「なぜ毛主席がこの本を選んだのか、について、日本では、西の秦に攻められ、亡びてしまった楚の政治家、屈原に〔田中を〕なぞらえたのだ、という解釈もありましたが」という問いに周斌はこう答えた（と久能は記している）。「いや、それは違います。毛主席はニクソン大統領にも同じ本を贈っているのですから。毛主席は大変な読書家で、単に愛読書を贈った、というだけのことです。全く他意はありません」と周斌が述べたという。周斌は、毛沢東が田中に『楚辞集注』を贈る前に、「ニクソンにも同じ本を贈った」と語った由だが、これは根拠のない憶測である。このような事実は、中国でも米国でもこれまで一切記録されていない。周斌の記憶違いと見るほかない。そのような間違った記憶に基づいた雑誌記事を根拠として、橋本の「作詩説」との関係は問わぬままに、安易に注釈に付記する服部の書き方は、まともな研究者のやることではない。

毛沢東は田中の「ご迷惑」という日本語に知的興味を示しつつ、「「迷惑」という言葉の使い方は、あなたの方が上手」と苦笑し、中国語の「迷惑 míhuo」は、『楚辞集注』に書いてある通り、日本語とはまるで意味が異な

ることを示す証拠として、6冊の線装本を用意していたのだ。毛沢東・周恩来の用意周到な気配りを考えると、橋本の作詩指導説は、根拠薄弱の曲解にすぎないことが分かる。チャイナ・スクール外しを行わなかったならば、外務省事務当局が毛沢東の真意を読みきれたかどうかは不明だが、外交とは、そもそも相手側の真意を読み切った上で、自らの要求を獲得することだ。相手側の意図がまるで分からない場合、外交はそもそも成り立たない。繰り返すが、私が橋本中国課長（のち中国大使）による日中国交正常化記録改竄をきわめて遺憾に思うのは、まさに彼の改竄によって、中国側の対日不信の直接的根拠を作っただけでなく、日本側が江沢民流の反日キャンペーンに異議申し立てを行う論拠を失わせた点である。田中の「ゴメイワク」という言葉遣いによる謝罪は、元来中国側の対日専門家にとって自明の事柄であった。それが外務省記録の改竄によって新たな火ダネが日中間に生まれ、広がり拡大したことが、国交正常化20〜30年の日中相互不信の大きな要因の1つであり、その後遺症が半世紀後の今日、「台湾有事」論まで悪性腫瘍のように広がった。このような日中相互不信の内実にまるで無頓着に、日中講和の精神を語り、官僚の放言に近い談話をもって、「埋もれていた現代史」をひもとくとは、百害あって一利なしではないか。国交正常化から半世紀、日本の新進研究者がここまで視野狭窄に陥り、国内の交渉体制、あるいは主張を論ずれば十分と認識しているかに見えるのは寒心に堪えない。

最後に一言。早稲田大学の毛里和子名誉教授は、『東方』（２０１２年５月号）および『中央公論』（２０１２年７月号）の服部著書評で「明晰なメッセージ」を発し、「抜きん出ている」と激賞した。日中共同声明の作成過程をめぐる双方の資料の大きな食い違いに、『日中関係』（岩波新書、２００６年）を書いて石橋湛山賞を得た毛里書評はいう。「日本外務省が新たに開示した外交文書をふんだんに使い、直接間接かかわった人々とのインタビューをとてもうまく活用している。そのため、本書は立派な史書でありながら、楽しく面白い「読み物」にもなっている」と。服部の宣伝文句にすぎない「新たに開示された外交文書」という説明を毛里は信じているらしい。実は、情報開示法によって公開された「田中・周恩来会談記録」は、１９８８年に外務省中国課が「省内執務資料」としてタイプ印刷したものと同じだ。「新たに開示された外交文書」が、十数年前の「省内執務資料」と同一であることを知らずに、毛里はこのように書く。外務省関係者（おそらくは橋本恕）は、この時点で改竄した。そこで失われたのは、（1）田中が「誠心誠意の謝罪」を表明した部分と、（2）尖閣問題棚上げをめぐる「三問三答」のやりとりである。毛里が、日中紛争の核心に位置する、これらの論点に関心を向けないのは不可解きわまる。気づきながら、この欠陥本を激賞したとすれば、何をかいわんやだ。

会員彼是

元中国語奨学生として

宮　秀夫（会員）

２０２２年は日中国交正常化50年ということで、新聞紙上などでもその言葉を目にすることも少なくありません。振り返れば往時茫々として今更ながら光陰如箭の感に堪えません。国交正常化数年前から中国は文化大革命のただ中にあって、我が国のマスコミはおおむねこれに好意的で、賞賛の言葉を惜しまないものも多く見られました。しかしながら、その実態は明らかではなく、竹のカーテンといわれたのもやむを得ませんでした。そんな中でピンポン外交から始まって、にわかに米中接近が現実のものとなったときは、水面下の動きを知るよしもなく、驚き以外の何物でもありませんでした。その後の我が国の国交正常化への動向は周知のとおりです。

さて、本協会の中国語奨学生については、事前の予備知識もなく、大学の学部事務所の掲示板で偶然募集記事を見掛けたことが本協会との御縁の初めでした。その当時、私は法学部の学生であり中国大陸にも中国語にも特に接点があった訳ではありませんでした。ただ高等学校の生徒であった頃に教科書以外の漢籍を少々読むことがあり、我が国で従来から行われている漢文訓読がすべてではないという漠然とした思いがあったにすぎません。もとより文学部で中国文学を専攻するのではありませんから、古来の典籍を北京音で読むなどということは現実のこととしては考えてもおりませんでした。採用面接の際に担当委員会の先生から「あなた方は余技として学ぶことになる」といわれた時に、それならできるであろうと思ったにすぎませんでした。

学習が始まってみると、夜間講習会ということで、受講生は若手サラリーマン風の人やら戦前満洲国での学習歴がある初老の紳士やら様々で、授業は難しいものではありませんでしたが、指導される先生は戦前からの経験に富む老練な専門家で、当時の私にはその学識と経験を十分に認識できなかったのは、今にして見れば残念なことでした。学習が進むにつれ、長期にわたり受講を継続することには障害の起こることもあり、それなりに努力を要することもありました。その一方で、神田の古書店にて本協会の会員の先生に偶然邂逅して何となく意を強くしたこともありました。

爾来幾星霜、その間には改めて学習を進める機会も少なからずありましたが、語学としては、今もって余技の域を出ません。それでも簡単な会話がどれだけ意思の疎通に役立ったか計り知れません。一方で本協会の活動も時代の趨勢に伴い、自ずから変遷もあり、中国語奨学生の制度廃止により、新たな後輩が発生しないことになり、やむを得ないことながら、いささか残念な思いがないわけではありません。

思えば本協会の恩恵には感謝して余りありというべきです。それにもかかわらず浅学菲才の身の為すところ無きただ慙愧の至りです。

陶々俳壇（ようよう）

陶陶句会
結果
2022年8月

兼題　「新豆腐」「日」　　**馬場由紀子**

手を引かれ見上げた刺繍布日傘　松島二三四
◎正子　子供の時分、日傘といえば刺繍を施した白の布傘でした。

一人居のクーラーつける匙加減　〃
○正子
○田紀子　一人だと節約と暑さの狭間で揺らぎますよね。

新豆腐しんと沈めり水の底　日野正子
◎明良　世俗を離れた青と白の世界が見えます。
○正堂　定形に切られた新豆腐が冷水の底に不動に沈んでいる夏の景が定まった。

美術館濃き緑陰を行く日傘　〃
◎正堂　美術館沿いの緑陰に日傘が見える。入館する人だろうか。
○善一　上野公園あたりを思われる景か。確かに緑陰を行く日傘が見えるようである。

岸の辺に己繕ふ羽抜鳥　伊藤正堂
◎田紀子　みすぼらしい鳥が羽繕いをしている。「みすぼらしい」と表現する人間の勝手に抗うかのように。ここに作者の矜持を投影しているかのようだ。
○正子
○善一　上野公園の池の端の岸辺で、夏から秋にかけて多くの鳥が全身の羽毛を抜け換える。それを自ら繕っている景。よく観察しているところが可。

白蝶のからみて高く点となる　〃
○善一　白い蝶蝶が交み合いながら飛んでいって空の高いところではそれが点となってしまったという景が良い。

南禅寺門前の京料理や新豆腐　橋本紅杓
◎善一　臨済宗派総本山南禅寺の門前には名物の豆腐屋が並んでいる。昔顧問をしていた大覚寺に参禅すると決まって美味しい料理に冷たい新豆腐が供される幸せにあずかった想い出が蘇る。

底紅や高き枝先誇らしげ　〃
○善一

僧と酌む昼餉のかては新豆腐　大内善一
◎紅杓　正岡子規が中山の蕎麦屋にて「新酒酌むは中山寺の僧どもか」なる句を作っている。基本的には酒は神事のために平安時代までは朝廷や神社の下で作られていたが、室町時代になると僧により興福寺などで作られるようになる。平安時代の「神仏習合」が要因だといわれる。
○明良　昔ながらの法事の膳でしょうか。
○田紀子　美味しそうな「新豆腐」に仕上がりました。「かては」は「かての」の方が落ち着きますね。

房総の波浪鎮もる日は秋へ　〃
○二三四　夏のパワフルな波も秋にはやや静かになるのでしょうか。日々海を見ていればこその観察、わずかな変化を見逃さない視点こそ俳句には必要、と改めて感じた次第。
○正子
○紅杓　高い秋空の下に広がる爽やかな海。寄せる波も夏に比べると清澄である。それが女性の涼しげな目元のたとえとなり、さらに「秋波を送る」という男性の気を引くためにする目つきの意味となった。

虫食ひの紫蘇の葉つみて新豆腐　瀬﨑明良
○二三四　今年獲れた大豆で作った、豆の香も高い豆腐。薬味として合わせるのは、庭に力強く生えている青紫蘇がふさわしい。虫も食べにくるくらいおいしい紫蘇の葉ならなおさら。あまりの虫食いぶりに驚いて「青紫蘇に虫食いてレース編み上がり」。
○正子
○紅杓　新豆腐を使った冷奴、紫蘇、生姜をのせゴマ油と醤油（ぽん酢）などをかければ多少の虫食いは気にならず新鮮な香りの夏料理を味わえる。
○正堂　一寸虫喰いの紫蘇だが新豆腐に添えるにふさわしい。

入道も日に押されつつにわか雨　〃
○紅杓　入道雲はむくむくとした雲で、大きくなると、てっぺんが潰れて入道と呼べなくなる。積乱雲の一種でやがて雨・雷をもたらす。

古池の闇の質量誘蛾灯　馬場由紀子
◎二三四　夏の夜、古池のほとりに立つ誘蛾灯に蛾や虫が飛び交っている。簡単に言えばそういうことなのですが、夏の夜の寝苦しさやその闇の深さを「質量」という言葉が的確に表しています。けっして明るくはない誘蛾灯の光は、闇に対比するというより同化するようでもあります。古池という人気の少ない場所もいい。希少な素材を扱っていてとても気になる句です。

瞽女の墓夜露にさます日の熱り　〃
○二三四　夏の盛り、何もかもが灼かれて熱を帯びます。薄幸の瞽女が眠る小さな墓石もしかり。夜がふけてようやく熱がひき、墓石に夜露が下りる。瞽女の涙のようでもあります。以前のこの句会で瞽女のお墓を詠んだ句がありましたが、同じお墓でしょうか。一言で強烈なイメージを喚起する「瞽女」を素材に選ぶ感性がすごいです。
○正子
○善一　私の故里安達太良山の隣に鉄山という山があり、かつてその山頂に、新潟から出稼ぎに来ていて不幸にして亡くなると、故里新潟の方につまり西に向けて墓が立てられた。日の熱りが夜露でさまされている。そのような景と思われる。

付添いサービスの役割

孤独の度合いが10等級あるなら、10級は1人で病院へ行くことだという言葉がネットに流れ、都会で1人暮らしをする青年や、独居老人の胸を刺した。IT時代、そうした人々に手を差し伸べるサービスを始める者が出た。病院だけでなく、受験の付添い、練習の付添いもある。さらにはゲーム、買い物、小旅行にも付き合ってくれる。すでに若者の間で流行している。

黄さんは28歳。以前は宅配便の配達をしていた。付添いサービスをするうちに独身青年の生活は端から見るほど格好いいものではないことに気づいた。あるとき尿道結石でひどい腹痛に見舞われた青年に付き添って病院へ行った。痛みで叫び続けた彼は30歳に満たないが、仕事が忙しくて不規則な生活のつけがきたと話した。

現在黄さんは仲介サイトを通じ受診の付添い以外にも、ゲームやバスケットボール、バドミントンの相手や、高齢者を訪問して調理や、片付け、話し相手、犬の散歩もする。そしてサービスの質向上のため技能訓練やスポーツの練習もする。「僕たちのサービスは人と人の心の距離を埋め、温もりを伝える仕事だ」と言う。

利用者の中には通院も運動も1人でできる若者もいる。彼らがこのサービスを選ぶのは心の支え、人との交流や、励ましが必要だからなのだ。

ある若者のバスケットボールの練習の相手になったときのこと。若者はコーチに叱責ばかりされて自信を失っていた。彼が求めているのは技術に関するアドバイスではなく、自信を取り戻すことだと気がついた黄さんは、若者を否定せず励まし続けたところ、3回もしないうちに、青年は明るさと自信を取り戻した。

黄さんはこの仕事のポイントをコミュニケーションとメンタルサポートだと感じている。都会の若者の多くは1人で買い物、食事をし、映画を見ることにも慣れている。ところがある時点、何かのきっかけで1人では支えきれなくなるのだと黄さんは思う。

付添いサービスは急速に成長しているが、業界の規範もなくサービスの質もまちまちだ。業界内で規制や評価制度、苦情処理などのシステムが確立されることが望まれる。

（『今晩報』2022年12月8日）

怪しいCMに検察動く

テレビコマーシャルには度々「神医」が登場する。よく見ると同じ老人が様々な広告に出演し、あるときは苗族（ミャオ）の、ある時はモンゴル族の、またある時はチベット族の伝統医術を受け継ぐ医術者を、はたまた熟練した漢方医を演じている。話の内容も、「我が家は何代にもわたり専門にこの病を治療してきた」または「今日は家訓に背くと決めた」とほぼ同じだ。これら詐欺まがいの「三品一械」すなわち、薬品、保健食品、特殊医療食品および医療器機の広告は、テレビに出る人に疑いを持たない高齢者の心理につけこみ彼らの懐を狙っている。

この手のグレーな産業のすそ野は広い。管轄も入り組んでおり、取締りは難しい。

先頃、最高人民検察院は人民監督員が検察の公益訴訟に参与する典型的な事例として、6件の事案を発表、違法なテレビ広告の取締りを「行政公益訴訟」の日常業務として推進するという姿勢を示した。これによって社会が協力して高齢者たちの不幸を未然に防ぎ、その源を絶つという機運を作ろうというのだ。

最高人民検察院が調査したところ、違法なテレビ広告の取締りには、証拠と情報の不足、処罰力の低さ、処罰方法が少ないなどの壁があることが明らかになった。

（『澎湃新聞』2022年12月20日）

青少年も生活習慣病

新版『中国心臓および血管の健康と疾病報告2021』によれば、我が国の心臓および血管障害患者は3億3千万人という。そのうち脳卒中が1130万人、心筋梗塞が1139万人、心不全が890万人、高血圧が2億4千500万人ということだ。

驚いたのはこうした老人の病とされてきた病が青少年にもまん延していることだ。中でも高血圧は顕著である。中国医学科学院北京阜外医院心不全センターの張健主任らによる分析によれば、1つは食生活、次に運動不足、そして大学受験のプレッシャーが要因だという。油っぽいもの、肉、塩分の高いもの、糖分の多い飲料などを子どもは口にしやすい。また、社会とのつながりが減り、スマホやゲームをする時間が増えて、体を動かさない子どもも多い。

（『半月談ネット』2022年12月26日）

診療費後払いに喝采を

「会計は診療後」という新しいサービスモデルが全国に先駆けて北京豊台病院で開始された。患者は限度額2千元までは信用を付与され、1回の診療ごとに1回の精算で済むようになった。これまでは受付、検査、薬の受取りごとに精算の必要があり、その都度並ばなければならなかったが、その必要がなくなり、コロナ感染のリスクも軽減した。

便利で人に優しいサービスである反面、不払いを心配する声もある。受診者が期限までに支払わない場合、保険会社が病院に賠償した上で受診者に支払いを促す。また、信用情報は北京市公共信用情報サービスに伝えられ、過去の支払い状況をもとに四半期ごとに利用者に評価がつくので、不払いの抑止になるだろう。

診療費一括後払いが普及するには、国の医療保険制度の後押しも必要だ。すべての診察料を保険対象にすること、重大疾病の入院費の保険負担率を上げることなどだ。

（『北京青年報』2023年1月3日）

子どもはカラオケ店に入れない

感染症政策の転換で社会生活が正常化し、レジャーや娯楽も回復しつつある中、子どもを連れてカラオケに行こうという人も多いだろう。しかし、これは法律で禁止されているのだ。新しい「未成年保護法」では未成年者がカラオケ店に入ることを禁止している。

しかし、当局の立入検査は主に休日や夏冬の長期休みに集中するため、長期的な効果はない。店も利益を優先し、大人と共に来店する未成年を拒むことは稀だ。保護者の意見や態度も曖昧だ。保護者が連れて入る場合、家族で楽しむ場合、悪い影響があると思わない、という意見が多い。

だが、例外や柔軟な対応は、子どもを守る保護ネットに穴をあけるのと同じだ。関係者は新法の宣伝と、未成年保護の重要性に対する意識向上に努めるべきだ。

（『新京報』2023年1月6日）

協会通信

◆令和4年度第11回理事会の議題（2月16日開催）

・確認事項

1月19日に開催された第10回理事会の議事録（案）が確認された。

・協議事項

「令和5年度事業計画（案）」「令和5年度予算（案）」について説明があり、次回3月の理事会で審議、決議することとした。

・報告事項

①資金繰りについて（定例報告）

②委員会報告（定例報告）

広報委員会より「善隣誌への掲載原稿について」の検討の要望があった。

③事務局報告

令和4年度の事業報告の作成を各委員会に要請した。

④その他

「協会の各種保有資料については、2000年に拓殖大学に寄贈し（2500冊：目録書あり）、協会員は何時でも閲覧できる」との説明があった。

◆令和4年度第3回諮問会の議題（2月24日開催）

「資金繰り」「令和5年度事業計画（案）」「令和5年度予算（案）」について説明があり、審議した。

（事務局長　竹前栄男）

同好会だより

〈一石会（囲碁）〉

会員募集中です。ご興味のある方は、事務局までご連絡ください。

〈俳句会〉

対面とズームによるオンライン併用での俳句会を開催いたします。ご興味のある方は、事務局までご連絡ください。

〈謡曲会〉

松木千俊先生のお稽古は1人ずつの個人指導です。ご興味のある方は、事務局までご連絡ください。

みんなの写真館

さくらの辻公園（表紙）

さくらの辻公園は、練馬区の石神井公園から少し離れた石神井川沿いのお花見スポットとして有名な公園らしい。春になると、約100本の巨木の桜がいっせいに咲き、見事な桜のトンネルを作るので、多くの花見客で賑わう。コロナの中で、人込みの花見名所に行きたくなったので、石神井公園の近くでうろうろしていたところ、偶然にこの公園に迷い込んで、目の前の桜のトンネルに驚いて、カメラのシャッターを押した。

（姜晋如）

旭山動物園のペンギン（表4上下）

旭山動物園のペンギンのお散歩です。ペンギンの大きいのにはビックリしました。1羽だけ列をはみ出して横に行っちゃったりして、どこの世界も一緒ですね。寒さ厳しいおり、皆様、どうぞお元気で。いつの間にかもう春ですが。

（塚原美津子）

2023年４月の行事予定

４日（火）　１４：00　謡曲会（松木先生お稽古）

12日（水）　13：00　俳句会（対面とZoomのハイブリッド方式で実施）
兼題「愛」及び当季雑詠から５句を投句（３月末までに）

13日（木）　14：00　公開 第１回講演会（対面とZoomのハイブリッド方式で実施）
「アフリカ～過去、現在、未来（対中、対日関係を含む）」
萩原孝一氏（アフリカ協会特別研究員、国際経済連携推進センター理事、桜美林大学非常勤講師）

21日（金）　14：00　公開 【善隣中国塾】（対面とZoomのハイブリッド方式で実施）
「全人代から読む習近平路線」（仮題）
塾長講演：矢吹晋氏（横浜市立大学名誉教授、当会学術顧問）

27日（木）　14：00　公開 第２回講演会（対面とZoomのハイブリッド方式で実施）
「満洲少国民の思い出」
藤原作弥氏（作家、元日銀副総裁、当会顧問）

４ 月 の 会 議 予 定

４日（火）13：00	国際交流委員会	20日（木）13：00	理事会（第１回）
11日（火）13：00	環境委員会	20日（木）15：30	広報委員会
12日（水）14：00	財政委員会	26日（水）13：00	東北委員会
18日（火）14：30	講演委員会(Zoom)	28日（金）13：00	諮問会（第１回）

※下線は通常日程に変更あり。

みんなの　写真館

INTERNATIONAL GOOD NEIGHBORHOOD ASSOCIATION（IGNA）
https://www.kokusaizenrin.com

ISSN0386-0345
二〇二三年（令和五年）四月一日・毎月一日発行
「善隣」第五三四号（通巻八〇一）
発行所　〒一〇五-〇〇〇四　東京都港区新橋一-五-五
一般社団法人　国際善隣協会
電話　〇三-三五七三-三〇五一番（代表）